

サクロ・モンテの起源

— 西欧におけるエルサレム模造の展開

関根浩子 著

評者 大野陽子

キリストの降誕は非キリスト教徒の多い日本においても毎年盛大に祝われる一方、キリストの復活を祝う復活祭はクリスマスほど知られていない。しかしキリスト教徒にとって、キリストの十字架上の死と復活は救世主による人類の原罪の贖いを意味する最も重要な出来事であり、現在もカトリック圏では聖週間から復活祭に様々な儀式が催される。北イタリアのロンバルディア、ピエモンテ州のアルプス南麓に見られるサクロ・モンテは、キリストの死と復活の場であるエルサレムの再現として発案された巡礼地として知られている。「聖山」という呼称からも分かるように、山岳の地形を利用した敷地に造営された複数の礼拝堂内に、逼真的な等身大の彩色彫像と壁画とを組み合わせてキリスト伝を表した複合的な施設である。

関根浩子氏が博士論文とその後の研究成果を基に上梓された本書は、サクロ・モンテをイタリアのみならず西欧全体におけるエルサレム模造の展開という大きな枠組みで捉え直そうとする意欲作である。第一章では、アルプス以北とイタリアの

先行研究における「サクロ・モンテ」の定義の相違、即ち前者ではアルプス以北にも見られる「カルヴァリオ山」や「十字架の道行」といったキリストの受難を信者に追体験させる施設と包括的に扱われているのに対し、後者では「サクロ・モンテ」をイタリア固有のものと思なす傾向が指摘され、本書の目的がこれらの見解に対する回答の提示であると示される。第二章ではイタリア最古の「サクロ・モンテ」造営開始以前のエルサレム模造の歴史を辿り、一四世紀以前は聖墳墓（キリストの墓）と復活聖堂というキリストの死と復活にまつわる聖跡が模造され、一五世紀以降はキリスト所縁のその他の聖跡の模造を伴った複合的な「代用エルサレム」が登場し、受難信仰の高まりによりキリストの十字架の道行を追体験する施設が誕生し始めたことが確認される。その上で、第三、四章では一五世紀末にエルサレムから帰還したフランシスコ会修道士の発議でヴァラッロとサン・ヴィヴァルドに創建された「サクロ・モンテ」の初期の姿の再構成を通して、両施設が西欧中世に作られた「代用エルサレム」と同様の構想から成ったことが指摘され、第一章で呈された問題への回答が示される。第五章では、まずヴァラッロとサン・ヴィヴァルドの二施設が一六世紀以降、物語的な配列による「サクロ・モンテ」へと展開されたことが確認され、ヴァラッロの施設に倣って対抗宗教改革期の北イタリアの各地に新設された「サクロ・モンテ」群がその主題と礼拝堂配列に基づいて分類される。次いでアルプス以北の文化の

影響が強い南チロルに見られる施設「カルヴァリオ山」が紹介され、それらは「サクロ・モンテ」とは典型的に区別すべきだが、いずれも共通の源は中世に登場した初期の「十字架の道行」の配列であると総括が示される。

西欧におけるキリストの受難信仰は種々の芸術表現を生み出しているが、氏が第三章で結論づけたように、イタリアの初期のサクロ・モンテは中世におけるエルサレム模造とは規模や再現度において一線を画し、特にヴァラッロのそれは中世の象徴主義から隔たったイタリア・ルネサンス特有の感性に基づく「写實的エルサレム」である。その写実性の一端を担う造形表現の独自性が本書で扱われないのは隔靴搔痒の感はある。とはいえ、評者もヴァラッロのサクロ・モンテにおけるキリスト伝の視覚化に関する拙著で北イタリアの巡礼地を取り上げ、それらの足の便の悪さは身に染みており、それら数多くの施設を実際に涉猟し、史料を仔細に調べ上げられた氏の精励な仕事ぶりは特筆すべきであろう。まさに労作という語にふさわしい本書が多くの読者を得んことを期するものである。

(おの ようこ/群馬県立女子大学准教授)



勉誠出版
A5判・352頁
4,200円(税別)
2017年11月発行

サクロ・モンテを通して聖地（オリジナル）と代用聖地（複製）の関係を考える

関根 浩子

北西イタリアのアルプス南麓には、山や丘の頂上か斜面上の限定された屋外空間に一連の礼拝堂や教会堂、修道院などの宗教建築を擁する「サクロ・モンテ」と呼ばれる近世の巡礼施設が20以上存在している。そして同施設の連続する礼拝堂内には、キリストの生涯や受難、あるいは聖母マリアや聖人の生涯などに関係する聖なる場面が、きわめて表現力に富む絵画と多くは等身大の群像彫刻によって演劇的に表現されている。このようなサクロ・モンテ群に対する認知度は、2003年にピエモンテとロンバルディア両州の主要な施設が群として世界文化遺産に登録されたためか、著者が調査・研究を開始した1996年前後に比べ疑いなく上がった。しかし、同施設に対する解釈は今もって一様ではない。それは、各々がサクロ・モンテの前史から発生、発展という一連の過程のうちの一面ないしは一時期に着目してきたためであり、逆に言えば、サクロ・モンテはそうした諸解釈のすべてを内包するものと言える。つまり、中世までの西欧の聖地模造や実際の聖地巡礼と霊的巡礼の伝統を受け継いで生まれ、カトリック教会の意向と北西イタリアの宗教的諸事情の中で独自の近世的形態を獲得して発展した施設がサクロ・モンテなのである。

サクロ・モンテ群の歴史的全体像は、20世紀末にはかなり解明されてはいたが、起源の問題は、イタリア国内に因を求めるだけでは解明できず、依然として未解明状態にあった。そしてその起源については、従来、聖地の番人であるフランシスコ会との関係や巡礼形態の変化、対抗宗教改革との関係などが理由として挙げられていた。しかし、サクロ・モンテを構成している礼拝堂の全体的配列（＝形態）や個々の礼拝堂の建築的特徴に着目して、その起源や展開を考察する試みはなされていなかった。そこで著者は、今もってなされていないこともあり、それを試みた15年前の学位論文を『サクロ・モンテの起源——西欧におけるエルサレム模造の展開』（勉誠出版）と題して昨年刊行した。拙著では、15世紀以前のエルサレムの模造建築の模造方法や構成要素の変遷、模造法に変化を生じさせた背景などを西欧の視野のもとに概観することで、また、同時代の西欧のその他の国々の類似の建造物や施設を比較、検証の対象にすることで、サクロ・モンテを西欧における長いエルサレム模造の系譜に位置付けるとともに、カトリック改革期にヴァラッロの「代用エルサレム」が聖地の再現よりも心的巡

礼に重きを置いた「サクロ・モンテ」へと改造され、それを手本として多様なサクロ・モンテが陸続と誕生した事実を、建造例を挙げながら跡付けた。

しかし拙著では、礼拝堂内の彫刻や壁画、並びにそれらの制作者については論旨の展開上殆ど言及できなかった。そこでそれらを紹介するため、ここ数年はヴァラッロのサクロ・モンテの最初期の彩色木彫群を含む北西イタリアの中世末期からルネサンス期にかけての彩色木彫群の実見による基礎調査を進めている。3月23日からは、ピエモンテの三都市を会場として、ヴァラッロの初期の代用聖地建造期に堂内装飾等に携わり同地域に真のルネサンスを齎したガウデンツィオに関する「Il Rinascimento di Gaudenzio Ferrari」展も開幕する。同展は、彼の初期から絶頂期までを、国内外から借用した彼自身の作品と同時代の代表的作家や追隨者の作品によって回想するものであり、中世末期から初期ルネサンスにかけての北西イタリアの美術の解明にも示唆を与えてくれるものと期待している。

さらに著者は、九州勤務になって以降、サクロ・モンテのような巡礼施設の日本における有無を調べるため、キリシタン関係の遺構や明治・大正期に建造された聖堂周辺を訪ね歩いている。しかし現在までのところ、斜面や丘を利用した「十字架の道行き」を除けば、欧州や南米のサクロ・モンテに匹敵する施設を見出せてはいない。その代わり、19世紀後半に主にフランスで起こった聖母マリアの御出現の場所の中でも最も有名なルルドの洞窟に関する聖洞窟模型が、当初はバリ外国宣教会の神父らによって、後には信徒たちによって日本中に築造され、今も築造され続けていることを知った。サクロ・モンテ群が聖地に巡礼できない信徒のための免償を伴った身近な代用聖地を手本に建造されたものであったことを考えれば、身近な場所でルルドにおける治癒の奇跡に与りたいとの願いから築造され始めた模造体も、近・現代における代用聖地（＝複製）と捉えられる。こうしたオリジナルと増幅する複製の関係の調査を通し、複製建造の企図者や、人間にとってのオリジナルと複製の意義や意味、その関係の変遷などを考えることが著者の現在のもう一つの課題であり、隣接分野の研究成果にも拠りながら、他の宗教におけるオリジナルと複製の関係やカトリックにおける両者の関係との異同の問題なども併せて考察していければと思っている。